

後半の活力維持が重要

指導部 松浦 一 宇

8月は希望の出穂期である。今年は、穂数も十分に確保されたイネが多く、昨年のように台風や極端な日照不足といった、異常気象等の襲来がなければ、上作コースを辿っているようである。

しかし、お天気が相手の米づくり農業であり、この先どのような気象条件が待っているのか予想も出来ない。これまでの経験や観察力を十分に発揮し、間違いない対応で秋の豊作に結びつけたいものである。

出穂直前直後の 活力維持が重要

必要にして十分な穂数が確保されても、十分な実りに至らなければ宝の持ちぐされとならねない。

イネの収量構成要素は、図1に示す通り、4要素に分けられ、収量はそれらを掛け合わせたものとして示される。

イネの穂数と一穂粒数との間に

は、多くの場合マイナスの相関関係（一方が増えると他方が減る関係）がある。品種は同じでも、穂数を多くたてると穂は小さくなる傾向があることは、実際によく経験してきた。

さらに、①×②で総穂数を算出しても、総穂数と登熟歩合との間には、図2に示されるような関係がある。点線の矢印Aが示した方向に、えい花数（穂数）が増加す

ると、登熟歩合は矢印Bの方向に低下する（マイナスの相関関係）ことを示している。

健全多収穫するためには、収量構成要素4つがバランス良く確保されることが重要である。

とりわけ、今年は写真1にあるように2・3号の下位分けつから順調に確保される基数（やがて穂数となる）が多いイネが多いので後半の活力維持に例年以上に努力して良質米の多収穫に結びつけたものである。

最近の米づくりは、特に、食味を重視する余り、出穂直前頃から葉色が下がり過ぎる（基準葉色以下）凋落が早すぎるイネが多く見られる。

- ① 穂数(本) (単位面積当たり) ×
 - ② 一穂平均粒数(粒) ×
 - ③ 登熟歩合(%) ×
 - ④ 千粒重(g) ×
- 収量(kg)

図1. 収量構成要素と収量の関係

昨年は、米粒が小さく、クズ米も多く発生したが、以外とタンパク値が高めの傾向にあった。

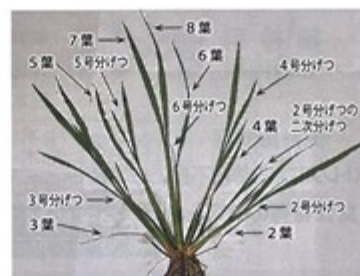


写真1. 下位の分けつが確保されている

豊満なお米に仕上げるためには穂肥で高めた葉色（栄養状態）を穂摘期までは一直線にして、その後、徐々に葉色が淡くなって行くのが理想的と考えている。

早すぎる凋落では豊満な実りは出来ないばかりか、食感の良いプリプリ米にはならないし、タンパク値も確実に低いとは限らないようである。

◎土性、砂（粗砂・細砂）・微砂・粘土など、どのような割合で混ざっているかということ、一つの言葉で表すと、埴土・埴土・砂土という名前がつけられている。こういう表し方を「土性」とよんでいる。土性の表し方も、農学会法と国際法とは違う。

農学会法では、粘土の割合によって土性を名づけているが、国際法では、砂・微砂・粘土などのような割合になっているかによって決めているようであるが、細かすぎるので詳細は割愛する。

農学会法の土性名は表1のようになる。

問題は、砂土・砂埴土ほどに、地力に乏しく、施肥されたチッソ等もパツと効いてパツとなくなり易い。逆に、埴埴土・埴土ほど、地力に優れ、施肥されたチッソ等が緩やかに効

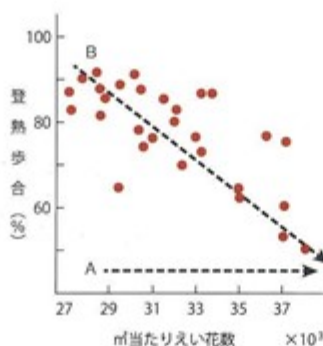


図2. モミ数が増えれば登熟歩合は落ちる（松島より）

表1. 農学会法の土性名

土性名	粘土の割合(%)
砂土	12.5>
砂埴土	12.5~25.0
埴土	25.0~37.5
埴埴土	37.5~50.0
埴土	50.0<

根の活力維持する水管理

いて長期間持続し易い。また、石灰・苦土等の塩基類も砂土等より多めに含まれている。

ベテラン農家ほど、それぞれの圃場ごとに土性に合った施肥方法や土づくりを実施されていると思われるが、若い農業者のために記述した。

水稲は、出穂直前・直後が一番水を必要としている時期といわれている。しかし、中干して酸化型土壌にした水田に4・5日間以上も溜め水したのでは酸化型に慣らされた根が急に還元型になることで傷むか、活力を失いかねない。季節的には台風シーズンでもあり、水のかきひきが重要かつ悩ましい時期でもある。台風襲来時は水で保護、2・3日間の溜め水は大丈夫といった対応を繰り返して、出穂後30日間は土壌水分80%保持に努めたいものである。